

II. 第六期事業計画

1. 計画策定の基本的な考え方

第五期の総括の過程で浮き彫りになった課題を踏まえ、計画策定の前提とした基本方針は以下のとおりである。

- (1) 第六期(平成 21～23 年)計画中に長期化が懸念される世界的経済不況の中で、国地方財政の逼迫や企業業績の悪化などにより、会費、助成金等の資金確保が困難になるとの前提で、限られた資源(人材・資源・資金)の最大限の活用を図る。
- (2) 「何をしたいか？」を明確にしたうえで、「何が出来るか？」を確認し、第六期計画中に「何をするか？」を明示する分かりやすい計画を策定する。
- (3) 事業(プロジェクト)の推進にあたっては、行政・地域住民・団体・事業者等とのパートナーシップを前提とし、それぞれの役割を明確にして取り組む。
- (4) このため、歴史街道推進協議会の 18 年の活動の成果、これまでのノウハウやストックを活用する。

本基本方針に基づき、メインルート事業、ネットワーク事業、広報事業をそれぞれ展開していくこととする。以下各事業について詳述する。

なお、各事業項目の末尾に「○」、「△」を記載している。

これは、資金的制約に関連する区分で、

「○：第六期において必ず推進する事業」

「△：国・地域等からの資金獲得に成功した場合に取り組む事業」

と 2 段階に事業を区分している。

特に「△」の事業内容については、より多くの知恵・夢・アイデアを生み出す自由闊達な議論を継続していくことが重要である。

2. メインルート事業計画

(1) 事業推進の方針

当協議会は、第 I 章で述べたとおり、1991 年に発足して以来各種の取り組みを進め、それぞれの分野でさまざまな成果をあげてきた。

しかしながら、『「歴史街道」づくりの提言』のコンセプトである「日本の主要な歴史の舞台となった伊勢～神戸への旅筋を内外の多くの人々に訪れてもらって日本の文化・歴史を体感してもらおう」という当協議会の最大のミッションともいえるべき取り組みについては、未だ不十分と言わざるを得ない。

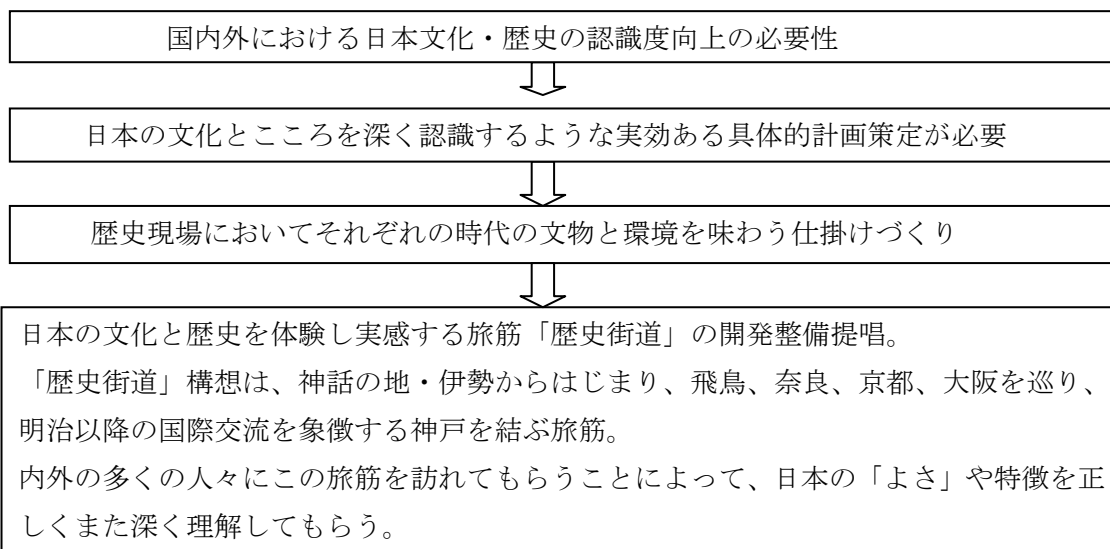
また、第四期計画の時代にも、『協議会にとっての第一の問題は「メインルート」のコンセプトが霞んできているということである。「メインルート」あつての「歴史街道」であり、現状ではその部分があまりにも際立っていない。』と問題提起しているが、現時点においてもこの問題は依然として横たわっている。

そこで、われわれはともすれば見失いがちになっている「原点」、つまり『「歴史街道」づくりの提言』のミッションを強く意識して、第六期のメインルート事業を展開していきたい。

◆歴史街道へのムーブメントづくり

「歴史街道」構想は、神話の地・伊勢から始まり、古代から中世にかけての三つの都—飛鳥、奈良、京都—とその近郊を巡り、秀吉以降の商人文化の中心地「大阪」、明治以降の国際交流を象徴する神戸を結ぶ旅筋で、内外の多くの人々にこの旅筋を訪れてもらうことによって日本の文化・歴史を正しくまた深く理解してもらおうということを基本コンセプトとしている。(下図参照)

『「歴史街道」づくりの提言』 骨子



江戸時代には、「一生に一度はお伊勢さんに」という流行語もできたくらい、民衆はこぞって伊勢参りに訪れた。最盛期には年間数百万人とも伝えられ、巨大なムーブメントが起こっていた。現代は国民の価値観の多様化、娯楽の多様化、旅行目的地の多様化などの要因により、伊勢参りのような巨大ムーブメントを望むべくもないが、第六期においては、提言のコンセプトに共感を覚える人々による「歴史街道へのムーブメント」を創出したい。これは提言の具現化という意味合いのほか、多くの来訪者を得ることで各地域の賑わい創出に資する取り組みであるため、地域と連携を図りながら重点事業として取り組んでいきたい。

具体的には、第五期に部分的に催行した「歴史街道ツアー」を旅行社と連携してメインルート全域に展開し、時間軸に沿ったタイムトリップを実現させることを手始めに取り組むたい。

また、提言に『追加すべき「もてなし」のハードやソフトの開発も重要になるでしょう。(中略) 伝統を大切にしない文化が長く栄えたためしはなく、新しい技術と発想の導入なしに長く保たれた伝統もまたありません。』と記述されているように、「歴史街道ツアー」の催行と併行して、ルートの更なる魅力付け、例えば来訪者の期待に応える景観形成や受け入れ体制整備にも、地域と共に取り組んでいかなければならない。

(2) 具体的事業内容

①歴史街道ムーブメントの始動

1) 歴史街道ツアーの拡大

(平安～室町、戦国～江戸時代、近代各ゾーンへの展開) (○)

2007・2008年度に、旅行社との共同企画で奈良を代表する「南都隣山会」の六大寺(東大寺、興福寺、西大寺、唐招提寺、薬師寺、法隆寺)を巡る個人旅行プランを実施した。また2008年度秋より同じく個人旅行プランとして、「歩いて観る歴史街道」と銘打った宿泊プラン付きの共同企画商品が関西圏、首都圏、中部圏で販売された。メインルート上のその他の地域については、催行にいたらなかったため、飛鳥、京都、大阪、神戸において、歴史街道倶楽部でこれまで実施してきた「歴史のまちウォーク」などの実績・ノウハウを活用し、ツアーを展開していく。

2) 寺社との連携 (○)

ムーブメントを起こしていく上で、寺社との連携は大変重要な要素である。前述の「南都隣山会」や「神仏霊場会」等と密に連携を図って事業を推進していくこととする。

3) 各施設等との連携 (○)

宿泊施設と前述の「歩いて観る歴史街道」において関係が構築できつつあるので、これを梃子に更なる連携を図っていきたい。

また、メインルートを活性化する上で交通事業者との連携は不可欠であるが、鉄道沿線における観光資源を再整理し、イベント等を企画・実施していく。

②歴史街道の魅力付けに関する取り組み

1) 「日本風景街道」事業の推進

「日本風景街道」事業は、「来訪者の期待に応える景観形成・受け入れ体制の整備」を具体化する上で、大変重要な事業である。重点事業と位置づけ自治体・NPO団体と共に取り組んでいく。

i) 「伊勢街道」(○)

奈良県桜井市から三重県伊勢市の伊勢神宮までを結ぶ「伊勢本街道」、「初瀬街道」の旧街道をルートとする日本風景街道「伊勢街道」は、歴史街道計画の古代史ゾーンを活動エリアとする事業である。2007年度のルート登録以来、奈良県域を中心にフォーラムの開催など活動を進めてきたが、翌2008年度には三重県に活動範囲を拡張してきた。第六期においても重点事業と位置づけ、関係諸団体と共に、街道沿いの地域資源を活かした活動に取り組んでいくこととする。

ii) 「まほろば」(○)

飛鳥から藤原京を経て平城京に至る国道169号と古代の道「山の辺の道」をルートとする「まほろば」は、歴史街道計画の古代史ゾーンから奈良時代ゾーンにまたがる地域を活動エリアとする事業である。このエリアには、1998年12月に世界遺産に登録された「古都奈良の文化財（東大寺、興福寺、春日大社、春日山原始林、元興寺、薬師寺、唐招提寺、平城宮跡）」があり、さらには、世界遺産の国内候補として、「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」も挙げられており、世界遺産をつなぐ地域である。「伊勢街道」と同様、2007年度にルート登録を受け、その後、データベースの構築やホームページの立上げ ([http : www.fukei-mahoroba.jp/](http://www.fukei-mahoroba.jp/)) などを通じて情報発信に努めたほか、2008年度にはフィールドワークを通じて、まほろばルートの楽しみ方を模索してきた。第六期においても重点事業と位置づけ、関係諸団体と共に受け入れ体制整備等に取り組んでいくこととする。

2) 町家店舗のネットワーク化 (○)

「町家店舗」については、「歴史街道ツアー」が部分的な実施に止まったため、連携できていない。今後、歴史街道ツアーのグレードアップ・魅力付けを行なうためにも、各地域の町家店舗の協力を得ていく。

3) 「語り部」(ボランティアガイド)との連携 (○)

地域連携による関西の”おもてなし”事業として定点案内を毎年実施しているが、各地域の有名観光資源の紹介を行うガイドから、歴史街道のコンセプトである歴史の流れ・時代の背景を踏まえた案内を行ってもらえるように各ボランティア団体と連携を図り研修の機会などを通じてブラッシュアップしていく。

③伊勢～飛鳥～奈良～京都～大阪～神戸における地域事業 (○)

当協議会では、1993年より「歴史街道モデル事業」を実施してきた。メインルート上の各ゾーンにおいても各地域の特性を表す「歴史テーマ」を設定し、歴史・文化を活かしたまちづくりを進めてきた。今後、第六期の事業を進めていく上では、これら地域整備の成果を最大限活用していく必要がある。以下、各ゾーンを代表する取組みについてその概略を紹介する。

1) 古代史ゾーン「明日香村」

亀石、猿石、酒船石などの謎を秘めた石造物や石舞台古墳、高松塚古墳など数多くの文化財が点在する明日香村では、古都保存法や明日香村特別措置法などにより古代のロマンあふれる村の風景を守ってきた。

モデル事業では、「古代史ロマンのさと」というテーマのもと高松塚古墳公園整備、マルコ山古墳環境整備、飛鳥川環境整備や、風土を活かした遊歩道整備などを実施し、整備が進められてきた。

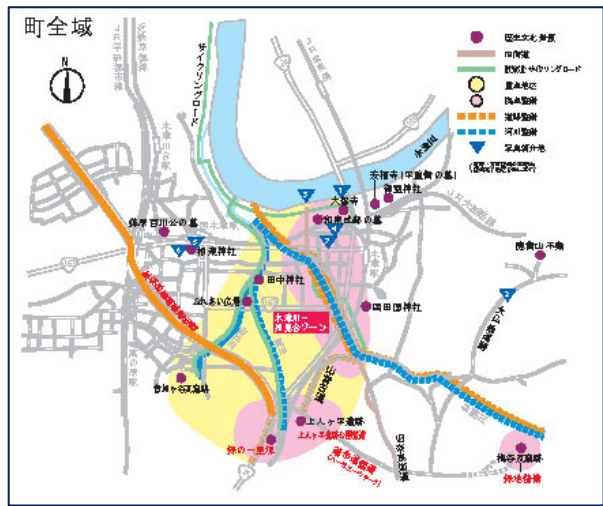
2) 奈良時代ゾーン「木津川市」

木津は、木津川の水運を活用して平城京の造営や東大寺・興福寺の建立のための木材などの港(木の津)として栄えたまちである。

モデル事業では、「木津川と瓦工房のまち」というテーマのもと、上人ヶ平遺跡公園整備、緑の一里塚整備、親水公園整備、山背古道整備などの整備が進められてきた。



明日香村



木津川市

3) 平安～室町時代ゾーン「宇治市」

世界遺産に登録された平等院、宇治上神社や四季折々の顔を持つ宇治川を有する宇治は「源氏物語・宇治十帖」の舞台となった場所である。1991年、ふるさと創生事業として「紫式部文学賞」などを創設したのをきっかけに「源氏物語のまち」をテーマにしたまちづくりが進められている。モデル事業では、宇治橋架替事業、宇治川護岸整備、源氏物語ミュージアム建設事業などが行われた。

4) 戦国～江戸時代ゾーン「枚方市」

京・大阪をつなぐ京街道の有数の宿場町「枚方宿」は、古くから舟運の物資の集積地としても栄え、くらわんか舟に代表される庶民的な活気と賑わいを今に伝えている。モデル事業では、「くらわんか舟と枚方宿のまち」というテーマのもと、京街道の整備、枚方宿資料館建設整備、淀川河川公園枚方地区整備、スーパー堤防事業などが進められてきた。



宇治市



枚方市

6) 歴史街道推奨ルートを選定 (○)

第五期計画において、『「点」から「線」への展開』ということ掲げていたが、これは第六期においても継承しなければならないコンセプトである。その中で、『「歴史街道」をデスティネーション（旅行目的地）として意識してもらうためには、「ルート」を具体的な「線」として描き出すことが有効である。』と述べているとおり、これまで「ここが歴史街道だ」と明確に言える「道」を特定してこなかったという現状がある。これにより、整備対象とすべき道、PR対象とすべきエリアが不明確で、関係団体の協力に少なからず影響が出ていたということは否定できない。

今後、インフラ整備を担う関係団体に街道等の整備を進めていただく上で、整備（投資）対象の明確化、PR対象の明確化ということは必要不可欠で、そういう意味で推奨ルートを選定は、大変重要な作業と考えられる。歴史街道構想との整合を念頭に置き、作業を進めることとする。

7) 各地域毎の取り組み

i) 「伊勢～飛鳥」(○)

「伊勢～飛鳥」の古代史ゾーンについては、複数の自治体をまたぐ広域なエリアであることから、長期的な視野に立った活動を推進し、活動成果を着実に積み上げていくこととしたい。日本風景街道事業の中で引続き情報発信に努めるとともに、2013年の式年遷宮に向けて「平成のお蔭まいり」や各種ウォーキングイベントなど外部の活動との連携を通じて、伊勢街道を軸とした伊勢～飛鳥のイメージ醸成と来訪機会の創出を進めていく。

ii) 「飛鳥～奈良～京都」(○)

奈良は2010年に平城遷都1300年を迎える。「飛鳥～奈良」については、日本風景街道事業の中で引続き情報発信に努めるほか、「まほろばルートの楽しみ方」の整理など、受け入れ体制整備を進める。「奈良～京都」については、日本風景街道事業に指定されていないが、地元諸団体と連携して受け入れ体制整備に努めていく

iii) 「京都～大阪」(○)

当該地域は、京都市、大阪市という観光都市に挟まれ、ややもすると特徴が埋没してしまう恐れのあるエリアである。第五期で実施してきた「京都～大阪連携会議」を継続実施し、地域資源を活用した賑わい創出事業を参画団体と検討していく。

また、京街道、西国街道、淀川周辺についてはウォーキングイベントなど具体的な事業展開を図る。

・京街道

京街道にまつわるウォーキングイベントなどを実施し、街道への来訪者を増やす取組みを進める。

- **西国街道**

西国街道の来訪者を増やし賑わいを創出したい。その具体的取り組みとして、西国街道にまつわるウォーキングイベントを実施するとともに、当協議会のホームページに街道の情報を掲載するなど情報発信を行っていく。

- **淀川周辺**

淀川は言うまでもなく流域に多大な恩恵をもたらしてきたが、一方で右岸・左岸地域交流の障壁となってきた。近年、大山崎～八幡を結ぶバイパスが整備され、これによって「乙訓八幡歴史ウォーク」や「三川合流イベント」が実施されるなど地域交流が促進されてきた。第六期においては、これら交流イベントに積極的に参画し連携強化に努めていきたい。

iv) 「阪神間」(○)

2004年度・2005年度に博物館・美術館連携事業を実施した。また、既述のとおり2008年度には国土交通省の「まちめぐりナビプロジェクト」に採択され、「阪神間美術館博物館ナビ」事業を実施した。第六期では、まちめぐりナビ事業の成果を活用するなどして、当該地域の活性化に資する取り組みを進めていく。また、2009年度は兵庫デスティネーションキャンペーンが実施されるため、当該事業との連携を図っていく。

3. ネットワーク事業計画

(1) 事業推進の方針 ～ビジョンを明確にした事業展開へ

「歴史街道」づくりの提言が発表された1988年時点では、「歴史街道」は今の「メインルート」のみをさす言葉であった。その後、関西全域の広域的連携によりこの計画を進めていこうと、1991年の協議会発足時には現在の2府6県（三重・奈良・京都・大阪・兵庫・福井・滋賀・和歌山）の各地域が計画に参加。1992年に発表された「歴史街道マスタープラン」では「メインルート」に加え、各府県単位での「テーマルート」が設定され、この両者を総称して「歴史街道」と呼ぶことになった。

しかしその後については、「テーマルート」という呼称がどうしても、「メインルート」の添え物、格落ち的な印象を与えることもあり、各地域の士気がなかなか高まらない状態が長く続いた。

1990年代中盤の府県計画策定後は大きな進捗が見えず、また、事業の多くがもっぱら各府県に委ねられるものとなったため、足並みも揃いにくかった。

「複雑すぎるルートがメインルートのコンセプトを霞ませることになる」「テーマルートが必ずしも各府県の特徴を浮き立たせるものになっていない」「府県ごとで途切れ途切れになるルート設定が旅行者のニーズに合っていない」といった意見もあった。

一方では、滋賀・和歌山や兵庫・奈良・三重の「テーマルート」部分から、姫路城・延暦寺・紀伊半島の参詣道が世界文化遺産に指定されるなど、この20年間で、関西の歴史文化資源をめぐる情勢が大きく変化した。

そのような中、2003年に作成された「歴史街道第四期計画」では「テーマルートの見直し」がうたわれ、現在の「ネットワーク」の原型が示されるとともに、期間内に、それを前提としたさまざまな実験的事業を実施していくことが申し合わされた。次いで07年に策定された「歴史街道第五期計画」では、正式に「テーマルート」を解消し、現状の「ネットワーク」に移行することの合意が得られた。

以上のように、「ネットワーク」に関わる事業は確かに動き出してはいるが、その歴史はまだきわめて浅いものである。「第六期計画」で求められるのは第一に、ここまでの活動をさらに定着・活性化させていくこと。第二に、これからは「できることをやる」時期から、基本方針に基づき戦略を構築し、継続的事業展開を図っていくことである。

◆基本方針

「ネットワーク」に共通する基本方針は、大きく以下の3つである。

①府県境を跨いだ歴史資源を積極的に活用する

観光客は行政区域を考慮せずに旅をする。また、観光的地域づくりを手始めとした行政枠を越える取り組みが、福祉・環境・防災などの複合的問題解決に向けた大きな糸口になることも、しばしば指摘されてきている。特に関西には、いわゆる府県境を跨ぐ場所に、特徴ある歴史文化資源の集積が見られるケースが多く、これらをうまく活用することにより、魅力ある観光圏が形成できる可能性が高い。

地域・テーマ	主な歴史文化資源・観光資源・関連人物
紀伊半島	那智山・本宮・新宮・吉野・高野・天川・尾鷲・熊野 熊野古道（中辺路・大辺路・小辺路）・大峯奥駈道・勝浦温泉・湯峰温泉・川湯温泉・
霊地・街道・温泉	白浜温泉・龍神温泉・洞川温泉・十津川温泉・和歌浦・串本・七里御浜・鬼ヶ城・瀨峡
堺～飛鳥	百舌鳥古墳群・古市古墳群・池上曾根遺跡・弥生博物館・竹内街道・
古代史の謎	近つ飛鳥・叡福寺（聖徳太子墓）・二上山・王陵の谷・近つ飛鳥博物館・橿原考古学研究所附属博物館・飛鳥・石舞台古墳・高松塚古墳・キトラ古墳・甘檜丘・藤原宮跡・大和三山・山の辺の道・三輪山・唐古鍵遺跡・黒塚古墳・法隆寺・藤ノ木古墳
丹後・但馬	城崎温泉、丹後半島周辺の温泉群、天橋立、伊根、浦島伝説、元伊勢伝説、徐福伝説、鬼伝説、アメノヒポコ伝説、丹後七姫伝説（静御前・安寿姫・羽衣天女・小野小町・細川ガラシャ・間人皇后・乙姫）鳴き砂、コウノトリ、玄武洞、出石そば、カニ、その他海産物

だが、実際には「府県の壁」を越えた文化観光事業は（自治体の経済難もあって）きわめて低調であり、行政課題の中でも常に後回し状態にある。

このような現状を何とかしていくのが協議会の役割である。

第五期では連携チーム（府県・主要市町村・交通事業者・地域リーダー・NPOなど）の発足や課題抽出、基礎的事業（資源の整理編集・パンフレットや広域MAP作成など）の実施に取り組んでおり、次のステップへの移行が求められる。

②「メインルート」のみで実施されてきた事業を「ネットワーク」に取り入れる

今後の持続的展開にあたり、各「ネットワーク」間の共通の課題は次のような点である。

- ・整備・保全された地域を、古道・旧街道などを活用し「点から線に」結ぶ事業ができないか
- ・博物館等、既存施設の振興に向けた共同事業と、それを契機とした情報発信が必要である
- ・案内所や語り部組織が地域単位でしか活動しておらず、広域的な情報提供の仕組みがない。
- ・複数府県にまたがるツアーコースが設定されておらず「何があり、どこにどうやって行ったらいいか」がしっかりと明示できていない
- ・単独地域では、圏外における情報発信に限界がある
- ・産業観光、農林漁業体験、エコツーリズム等、新しい観光形態への対応が必要である

これらの課題解決に関連し、すでにメインルートではいくつかの類似事業が実施されている。

そのような、メインルート中心で実施されてきた事業ノウハウを、今後は積極的にネットワーク地域においても応用していく。

例えば、語り部が連携しての事業は、従来、「メインルート」のみで実施されてきた。広域案内所を「歴史街道 i センター」として連携させる事業や、ツアー開発、歴史的町並みを活用した事業なども「メインルート」が中心であった。

「語り部の定点案内」は春・秋の時期に、メインルートの 17 程度の地域（語り部組織）を対象に実施しているが、適性の高い「ネットワーク」地域でも同様のことを実施したり、すでに地元主導で実施されている事業（例：竹内街道にそっての「大阪・奈良歴史街道リレーウォーク」）をさらに積極的に支援することなどが考えられる。

同様に、広域案内所のネットワークについては、歴史街道 i センターが 26 施設、「道の駅・歴史街道 i センター」が 15 施設程度であるが、同様のシステムをまずは各「ネットワーク」内で検討し、最終的にはそれを関西全域に拡大していく方向が考えられる。

ツアー開発などについても同様である。「第五期」においては、旅行エージェントと連携したツアーはメインルートでのみ実施された。「第六期」では共同事業参加市町村などを中心に、ネットワークにおける「定番ツアー」づくりを進め、旅行エージェントとの連携や、着地型エージェントの発足、あるいはそのネットワークづくりに取り組む。

歴史的町並みを活用した事業については、メインルートにおいて「町家店舗のネットワークづくり」が行われているが、今後は関西圏における「伝統的建造物群保存地区」の面的な連携事業についても考えていく必要がある。

これら以外に「ネットワーク」ならではの新しい取り組み分野として、歴史文化の魅力に加え、各地域のエコツーリズム、アグリツーリズム、インダストリアルツーリズムなどの情報を広く発信していくことも課題である。

③各「ネットワーク」固有の課題解消に取り組む

多くの部分にメインルートでの事業ノウハウが活用できると言っても、資金やマンパワーに限界がある限り、全てのネットワークで短期間に、上記の各課題をクリアすることは無理である。

そこで第六期においては、それぞれの地域において最もニーズが高い課題を取り上げ、その解決にモデル的に取り組むことにする。

このような動きを通し、歴史街道推進協議会の主たる役割を「関西全体での地域振興」から「ネットワーク単位」でのそれへと緻密化することにより、活動全般を進化させて行く。これが第1段階である。

広域に及び、交通の便に恵まれない紀伊半島ではまず第六期に「交流会議」と「案内所のネットワークづくり」を軌道に乗せ、「自然や農林漁業体験などもまじえたツアーづくり」に着手したい。

堺から飛鳥にかけての古代史連携では「世界遺産登録を推進」するとともに、「古道の活用や施設連携なども含めた来訪者の受け皿づくり」を考えていく必要がある。

丹後・但馬については「広域マップの活用」を手始めに、両地域の交流事業を進めたい。

戦国～江戸時代関係地域の連携については各地域（福井・滋賀・播磨）ごとの事業を軌道に乗せながら、JR新快速に沿った連携事業や関西全域にわたるテーマ別連携の実施についても模索する。

次の段階では、六期においてA地域で実現した事業ノウハウを七期以降、B・C・・・地域で活用することによって、ネットワーク事業を段階的に充実させていくことを目指したい。

資金的制約により、以下では各事業を「○：第五期において必ず推進する事業」「△：国・地域等からの資金獲得に成功した場合に取り組む事業」に分類して記述したが、特に「△」の事業内容については、より多くの知恵・夢・アイデアを生み出す自由闊達な議論を継続していくことも重要である。

(2) 具体的事業内容

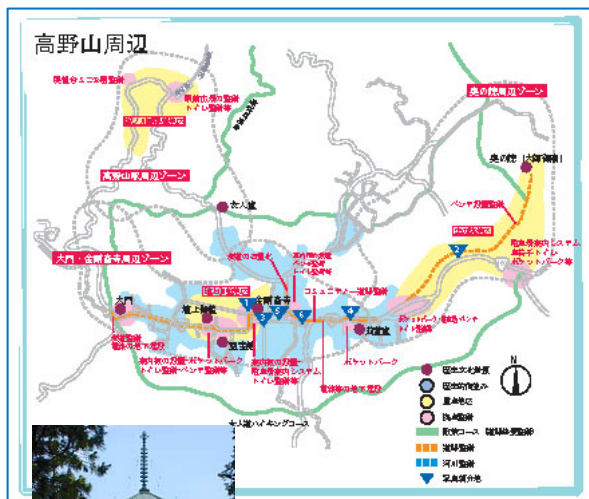
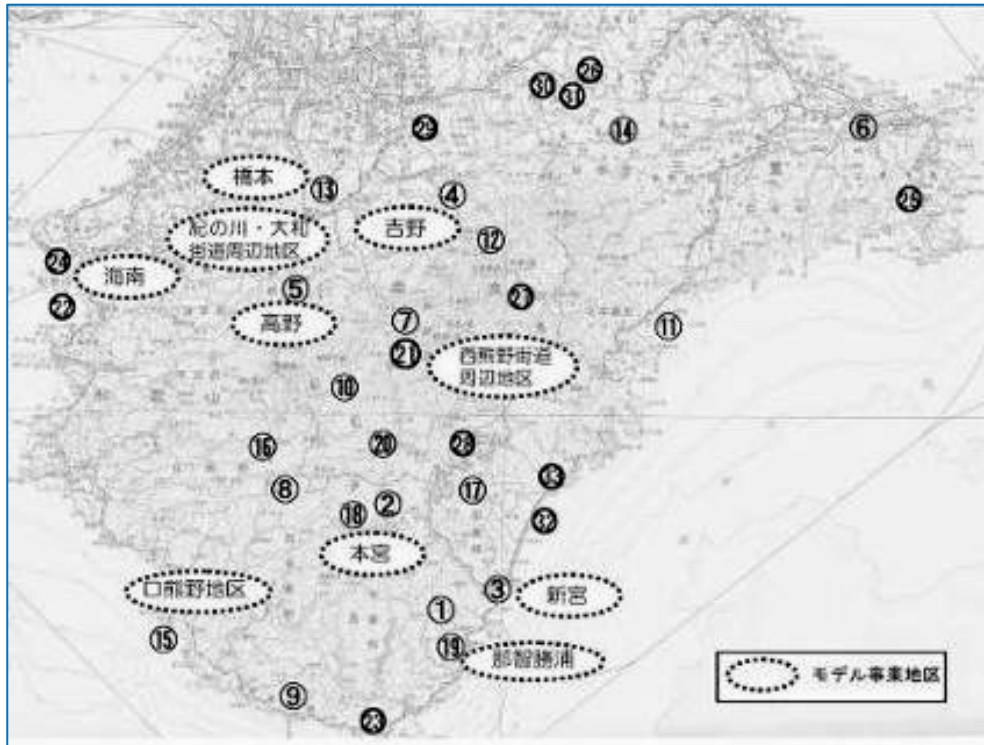
① 紀伊半島における事業

1) 地域整備事業（△）

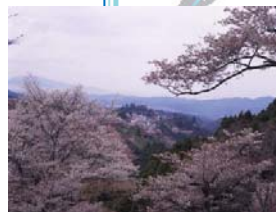
第五期までの期間において、紀伊半島では主要地域での計画策定がおこなわれ、ほとんどの地域で整備事業が実現している。事業をめぐる情勢は昨今、大きく変化しているが、引き続き、国道事務所等を含めた密接な関係づくりをサポートしていく必要がある。

<歴史街道モデル事業実施地区>

吉野町、西熊野街道周辺地区、天川村、橋本市、海南市、新宮市、紀ノ川大和街道地区、口熊野地区（田辺市・上富田町）、高野町、本宮町（現田辺市）、那智勝浦町



高野町



吉野町



那智勝浦



田辺市

また、これらをつなぐ道路や街道関係の事業、日本風景街道計画についても、各地域・団体とともに取り組んでいく。



2) 紀伊半島交流会議 (〇)

メーリングリストによる情報交換や主要メンバーとの交流を続けてきたが、各地域間が遠距離であること、また世界遺産フィーバーが一段落したこともあって、活動は停滞気味である。再活性化が第六期の目標になる。



紀伊半島交流会議 発足会

3) ツアー事業 (〇)

第六期においてはまず「高野山」、「吉野・天川」、「熊野古道」といった各1泊のツアーを定例化させたい。

世界文化遺産指定地のうち、ポピュラーな「高野山」「吉野」「熊野古道」「東紀州」は従来、バラバラに情報発信されてきたデスティネーションであり、鉄道路線で見ても、高野山(南海)、吉野(近鉄)、和歌山県側の熊野古道(JR西日本)、東紀州(JR東海)という風に別れているため、なかなか統一的なPRはできてこなかった。

従って、まず当面は各地元との連携の下、これらを現状よりはやや深く体験できるコースを考案するとともに、何回かに分けて紀伊半島のリピーターになってもらうキャンペーンを考えて行くこととする。

ここで、「やや深い体験」のヒントとなるのは、宿坊での宿泊(金剛峰寺ほか:高野山)、修験道1日体験(吉野)、農漁業などをまじえた「ほんまもん体験」(紀州ほんまもん倶楽部:熊野古道)、ツアーデザインセンターによる各種の体験ツアー(東紀州)といった、各地にすでにある試みである。

何回かに分けて熊野古道を歩いて制覇するといったツアーなども、交通機関やエージェントまかせではなく、もっと地元主導で企画していてもおかしくない。

「ほんまもん倶楽部」の体験メニュー

■農林漁業体験

・地曳網・料理体験・農作業と農家の一日体験 等

■生活文化体験

・風船ポンのランプシェードづくり・オリジナル植木鉢作り地域の食体験・ガーデニング・かまど飯炊き体験 等

■熊子歴史文化体験

・肝だめしと宮司の怖いお話・和歌山城歴史散歩高野山町石道歴史散策ウォーク 等

熊野古道散策／知恵自然観察体験／スポーツ体験／匠地域産業体験
など

一方で、「第2名神」の開通などのアクセス改善により紀伊半島をめぐる情勢は大きく変化しつつある。

アクセスに恵まれなかった紀伊半島において、1回の旅で主要箇所を制覇することは困難だったが、京阪神から東紀州への日帰りツアーが可能になるなど、地域にとってのチャンスが大きく広がりつつあり、紀伊半島を一括して捉える広域キャンペーンの有効性が見えはじめてきた。

関西へのPR面では西日本高速道路、JR西日本、南海電鉄との連携が必要である。私鉄との連携面では高野山、吉野を中心に、箕面・六甲山（阪急・阪神）、比叡山（京阪）といった、「歴史的な山」を私鉄が共同PRしていく方法などを模索したい。

全国への情報発信のヒントとなるものとしては、南海電鉄と高野町ほかが東京・青山で開催し好評を博している「高野山カフェ」がある。以外にも奈良県は首都圏に観光プロモーション・オフィスがあり、三重県も毎年、首都圏で盛大なプロモーション活動をおこなっている。

これらの活動を通して「部分的」にアピールされている紀伊半島を、できるだけトータルに他地域情報も含め相互発信していくことが当面の1歩と言える。



高野山カフェ（写経体験）



同（カフェゾーン）

海外への情報発信のヒントとしては、高野山で歴史街道推進協議会が実施したフランス人記者の招聘が、同国における「高野山ブーム」のきっかけとなったことなどがあげられる。

熊野古道などを含め、欧州をターゲットとした情報発信も必要であり、協議会がかつて作成した10言語HPなども再活用したい。

4) 案内所 道の駅のネットワーク形成 (○)

紀伊半島で喫緊に解消すべき課題に、現地を訪れても全域や他県の地域を案内できるシステムがなく、各地情報がバラバラにしか入手できないことがある。

第五期の終盤において、主要な観光案内所や道の駅で共通の広域案内が可能なネットワークづくりに着手したので、まずはこれを軌道に乗せるとともに、「道の駅」への拡充を図りたい。



熊野古道センター (尾鷲市)



熊野古道館 (田辺市)



観光案内所 (高野町)

(紀伊半島の道の駅)

道の駅・駅名	路線名
しらとりの郷 羽曳野	主要地方道 美原太子線
吉野路 大淀 i センター	国道169号
十津川郷	国道168号
ふるさとセンター大塔	国道311号
紀州備長炭記念公園	主要地方道 田辺龍神線(県道29号)
熊野古道 中辺路	国道311号
奥熊野古道 ほんぐう	国道168号
水の郷 日高川龍游	国道424号
龍神	国道371号
瀨峡街道 熊野川	国道168号

5) 新しい魅力の打ち出し (△)

中長期的な課題として上げられるのは、「多様な温泉文化の活用」である。

和歌山県を「宿坊+温泉(龍神—白浜—湯ノ峰—勝浦)をハシゴできる、長期滞在コース」として捉えなおし、これに洞川温泉(奈良県天川村)、十津川温泉(同・十津川村)などの周辺エリアを組み合わせた、「温泉めぐりルート」として紀伊半島の魅力を違った角度から表現できれば面白い。

温泉巡りルート为例



龍神 ↑↓



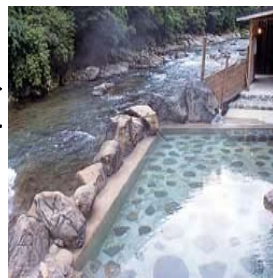
↑↓ 白浜 ↑↓



本宮温泉郷 ↑↓



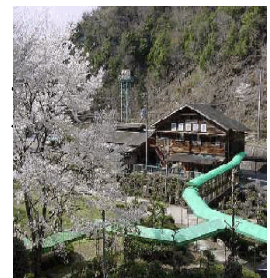
洞川



十津川



那智勝浦



湯の口

世界文化遺産登録フィーバーが終え再び仕切りなおしの時を迎えようとしている中、紀伊半島が持つおくべきもう1つの視点は「世界文化遺産によって形成された観光イメージにいかにか上積みをしていくか」という点である。

世界文化遺産登録によってもたらされた「深い」あるいは「神々しい」イメージとは全く別の視点で、観光イメージを刷新するような「もう1つの柱」、すなわち宿泊地としての癒しや、くつろぎの魅力をうまく前面に押し出していくことも重要である。

これからは海外旅行に飽きた元気な熟年世代が続々とリタイヤしていく。

「温泉めぐり」を柱に、「神々しい歴史」「雄大な自然」、さらには着地型メニューとしての「ほんまもん体験」や「海・山の幸」。

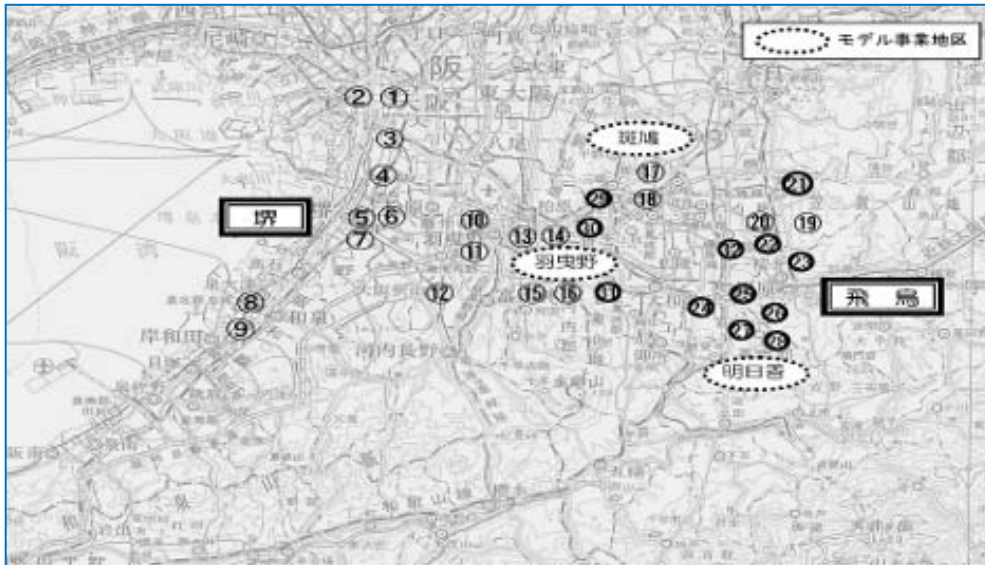
それらを満喫できる「7泊8日」コースをそんな世代に提案して行きたい。

②古代史ネットワーク（堺—飛鳥、丹後・但馬）における事業

1) 世界遺産登録の推進（南大阪～飛鳥）(○)

堺～飛鳥については、世界遺産登録の推進が第一の課題である。

また、それに合わせ、観光客の増加にどう対応するか、訪れる人々にどう地域をアピールするかの戦略を練っていく必要がある。



2) 地域整備事業 (△)

歴史街道モデル事業は堺～飛鳥間で羽曳野市。丹後では広域的計画が2地区で策定されており、丹後半島とそのつけ根の部分をほぼカバーしている。

京都府域では以外に、京丹波町、八木・園部（南丹市）で。また、兵庫県北中部では出石（豊岡市）のほか、和田山・生野（朝来市）と篠山・三木・多可町でも計画策定がおこなわれている。

引き続き、国道事務所等を含めた密接な関係づくりをサポートしていきたい。

整備計画例：北丹後地区（京丹後市）・口丹後地区（福知山市、与謝野町、京丹後市）



堺～飛鳥間においては「世界遺産登録」の推進とともに、広域的な観光客の受け皿づくりが求められており、竹内街道や南阪奈道路の利活用などもふくめた、定番観光コースづくりを急いでいく必要がある。

丹後・但馬については、両地域ともに「歴史街道モデル事業」が進められており、モデル事業とあわせてスタートしたソフト事業の中には「丹後・歴史街道100キロマラソン」など、すでに全国区になっている事業もある。

両地域ともに今後は、幹線道路の活用や整備推進とともに府県境をまたぐ広域整備計画を策定し、2つのエリア（堺・飛鳥、但馬・丹後）にまたがる整備計画や歴史文化資源を「点から線に」繋げていくことが理想的である。

個々の資源や整備箇所を結ぶものとして、竹内街道、丹後半島などで「風景街道（シーニックバイウエイ）」事業が推進されているが、丹後・但馬については、圏内の移動・連携だけを考えるのではなく、高速道路やJRと連携し、大阪・京都発で篠山・丹波などに立ち寄り、日本海に抜けるようなコースを設定していくことも必要である。



歴史街道100キロマラソン



竹内街道の整備（羽曳野市）

3) 連携会議と地域リーダー支援（〇）

3つの「ネットワーク」の中で最も市民活動が盛んなのは恐らく、この「古代史」エリアである。数々のユニークな催しが実施されており、それらの活動支援に力を入れたい。



行政や施設を交えた連携会議については現状、年に1回程度の情報交換会を実施している程度であるが、第六期においては国からの事業予算獲得に一層の力を入れ、事業集団としての発展をめざしていきたい。

4) 世界遺産登録を踏まえた受け入れ体制の整備（堺～飛鳥間）(○)

飛鳥・藤原京ならびに百舌鳥・古市古墳群の関係地域においては、世界遺産登録の有力候補地となっており、うまく行けば第6期の期間内にも、大きな注目が集まる場所になることが想定できる。

予算が獲得できれば、首都圏等における地域紹介シンポジウムや、「歴史街道～ロマンへの扉～」の映像を再活用した情報発信（DVD・インターネット・携帯など）なども検討したい所である。

ツアーについては、モニターツアー含め、何種類かを実施してきたが、第六期においてはまず、堺～飛鳥において、堺・橿原の主要ホテル、博物館、NPO等とも連携して、3泊4日程度の「古代史探訪コース」を確立させたい。

竹内街道の活用、各地域や博物館の学芸員などとも連携し、古代史を巡る定番ツアーコースとしての商品化をめざしていきたい。

堺～飛鳥に関連し、中長期的な夢として描けるのは、関空や新幹線駅を起・終点にした「日本の代表的世界文化遺産を歴史の流れに沿って巡ることができるコース」の設定である。

関空～（紀伊半島）～百舌鳥・古市古墳群～飛鳥～法隆寺～奈良～宇治～京都・大津～（大阪）～（神戸）～姫路城。

2つの地域が新たに世界遺産登録された暁には、新たにこのルート形成を検討していくことも、歴史街道計画にとっての新たな選択肢であり、そういった試みを契機に将来、関西が日本やアジアの世界遺産連携のリーダーシップを取っていくような方向も見据えられる。

5) 広域マップの活用（丹後・但馬間）(○)

丹後・但馬については、来訪者への共通の情報提供（丹後情報を豊岡で、豊岡情報を丹後で）、また高速道路、JRとの連携などが重要なテーマとなる。

五期に作成した広域マップをできるだけ多くの箇所（宿泊施設・駅・店舗など）に掲出してもらえよう、働きかけをおこないたい。

③戦国～江戸時代関連地域（福井・滋賀・兵庫ほか）における事業

1) 全体事業（△）

歴史街道モデル事業がほとんどの主要地域で進められている。



永平寺町



近江八幡市



彦根市



大津市

これらを結ぶルート、街道事業としては、福井県、滋賀県にすでに「整備地区を結ぶ構想」があるため、個別に後述する。

広報PR面では、「SAMURAI」ブームがあり、海外PRは概ね良好に推移してきたが、範囲が広いため、国内については、物産展とあわせて実施してきた程度である。

理想の1つはJR新快速に沿ったPRを実施していくことだが、地域間の温度差もあり、事業実施に至っていない。

例えば祭の活用や、新快速に沿って各地域が共同で市町村マークを活用するといったことが、全体的連携の大きなきっかけとなるかも知れない。

ツアーに関しては第六期において、各エリアを毎のウォーキングツアーなど、地域毎の魅力の発掘とあわせ、京阪神からのプラス1～2泊のコースを確立し、商品化をめざしたい。

<スタンプの活用例>



2) テーマ連携 (△)

戦国～江戸時代関連地域に限った話ではないが、関西全域を「面」として捉え、特定テーマをもって連携していくといったことについても、引き続き推進を検討すべきである。

<三大英傑ゆかりの町>



<祭事連携>



<重要伝統的建造物群指定地域>



その他、日本酒の産地間の連携を深め、それを世界に普及するような事業に取り組むといった方向性もあるかも知れない。また、既存の歴史街道スタンプを活用し、姫路などの世界遺産登録地間で共同事業を実施することも可能だろう。

鉄道会社が連携し、西国街道（阪急）・京街道（京阪）・紀州街道（南海）・竹内街道（近鉄）などを活用したハイキング事業を展開していく、といったことについても可能性を追求したい。

3) やまぎわ歴史街道（福井）(○)

北陸3県の中で県としての個性が最も見えにくく、宿泊客の多くは隣接する温泉地や金沢・能登へ。福井は前後に特定施設が「つまみ食い」されるような位置に甘んじている。

歴史資源＋文化体験施設を集大成（ルート化）してPRし、北陸行きの観光客を県内で1泊させる方法を考えていく必要がある。

「福井やまぎわ歴史街道計画」への推進協力や、高速道路との連携、新幹線開通を睨んだPR戦略構築などに取り組んでいく。

<福井やまぎわ歴史街道>



越前打刃物(越前市)
越前和紙(越前市)
越前漆器(鯖江市)
一乗谷朝倉氏遺跡(福井市)
大本山永平寺(永平寺町)
福井県立恐竜博物館(勝山市)
平泉寺白山神社(勝山市)
越前大野(大野市)

また、現在のところ、戦国～江戸時代のネットワークにおいて、地域間の連携チームが存在するのは滋賀県のみである。

福井県、兵庫県等については、必要に応じて検討する。

4) 日本風景街道「琵琶湖・中山道」の推進 (○)

日本風景街道「琵琶湖さざなみ街道・中山道」をどう推進していくかに尽きる。

「さざなみ街道」については大学駅伝や「のろしイベント」など、ユニークな行事とも連携しつつ、エコキャンペーンやツアーの商品化、また案内標識などの整備などにも取り組みたい。JR、高速道路、サイクリング関係者、ルート上の事業者や地元メディア、環境団体等とのさらなる連携も必要である。

中山道については宿場会議を継続しつつ、道標の整備、ウォークイベントの実施、街道並木の復元などに知恵を絞りたい。

京阪沿線に位置する比叡山については単独地としてのツアー実施に加え、前述の通り、高野（南海）・吉野（近鉄）・箕面（阪急）などとともに、私鉄間の連携事業としてもアピールしていく方法もある。

<日本風景街道 琵琶湖さざなみ街道・中山道>



三井寺	彦根城
石山寺	龍潭寺
瀬田唐橋	長浜城
草津宿本陣	大通寺
東門院(守山観音)	木之本地蔵尊
新町通	琵琶湖博物館
日牟礼八幡宮	草津宿街道交流館
八幡堀	佐川美術館
西の湖	歴史民俗資料館
長命寺	かわらミュージアム
安土城跡	滋賀県立安土城考古博物館
観音正寺	琵琶湖博物館

5) 姫路を中心とした周辺観光の推進 (△)

5つの国（摂津・淡路・播磨・丹波・但馬）ごとに持ち味が違う兵庫県に関しては、このようなルート設定はおこなっていない。

播磨地域においては08年の世界菓子博の成功や姫路城の大改修を期に、周辺地域（赤穂・明石・一乗寺など）とのネットワークづくりに取り組みたい。

産業観光（例：生野・三木）や特産品（例：山田綿）など「お城以外」をどう際立たせることができるかもポイント。菓子博成功のイメージの活用や、産業観光的要素の導入にも取り組みたい。

4. 広報PR事業計画

(1) 事業推進の方針

歴史街道計画の3つの目標の1つ「日本文化の発信基地づくり」のセンター基地が歴史街道推進協議会であり、各地に展開するサブセンター基地とのバランスの取れた情報発信を行なっていくことが基本となる。

関西圏内のサブセンター基地からの情報発信は、メインルート事業とネットワーク事業との連携で進めるが、第六期計画での広報活動の重点は、地方自治体や関西の広域事業団体との協調を図るなどの努力により、関西圏外、とりわけ首都圏に対する認知度の向上を目指す。

また、市町村共同事業については、従来のスタンプラリーを含め、新たな広報宣伝の手法を検討することにより充実を図っていく。

(2) 具体的事業内容

①「歴史街道」を具体化した情報発信（〇）

デスクティネーションとしての歴史街道を意識し、旅の道筋を中心にした情報発信をする。

②情報発信先に応じた広報の推進

1) 一般向け広報（スタンプラリーを含む）（〇）

まず歴史街道に興味・関心を持ってもらうため、歴史・文化資源の観光的要素を前面に出し、わかりやすい形で「歴史街道」の魅力を伝える。

また、市町村共同事業として実施しているスタンプラリーを含め、新たな広報宣伝の手法を検討することにより充実を図っていく。

2) 会員・関係者向け広報（〇）

歴史街道倶楽部と連携して倶楽部会員誌の充実を図る。

3) 関西圏広報（〇）

テレビ番組、電子媒体、活字媒体をはじめ、地方紙やミニコミ誌などの地域密着型の媒体も含めた情報提供を積極的に実施する。また、歴史街道関連のイベントやツアー商品などを積極的に活用する。さらに、会員団体主催の催しや広報誌等での連携も積極的にすすめる。

4) 首都圏広報 (○)

マスコミと連携した一般向けの講演会、テレビ番組などの映像の活用などについて継続的に実施するとともに当協議会と関わりのあった首都圏マスコミ・関係者のとのコミュニケーションを積極的に行い継続的な理解促進活動を行う。

例えば、関西広域機構の首都圏チャンネル、府県の東京事務所、近畿6府県観光情報交換会などとの連携のほか、首都圏のキーマンやメディアに対する説明会や情報交換会の再開などが考えられる。

また、例えば、関西経済連合会や関西広域機構などとの連携を図り、共同体制による首都圏広報の実施、あるいは関西を素材とした他団体主催の首都圏広報に参画して歴史街道の広報PRの機会を獲得する、などの方法も検討する。

5) その他の地域への広報 (○)

その他の地域においても、公認ガイドブックや電子媒体の認知拡大に努力するとともに、他団体が主催する展示・催物等に参画するなど、PRの機会を見つけていく。

6) 他団体との連携による海外への広報 (○)

関西広域機構などの関係団体の協力による情報提供を継続するとともに、パンフレット、WEBなどの媒体をはじめ、DVDや歴史街道二十一景絵葉書など、協議会が蓄積してきたツールを維持・更新・活用して、「歴史街道」情報の海外への発信につとめる。

③外部媒体を通じた広報の推進

広報手段の多様化を図ることとし、特に外部媒体を通じた広報の推進に重点を置く。

1) メディアとの関係強化 (○)

新聞社、テレビおよび制作会社、旅行雑誌社のほか、ライター、カメラマンなどのメディア関係者との関係強化は、積極的かつ継続的な情報提供がベースとなるが、加えて、以下の個別の取り組みを行う。

・テレビ番組放映協力

ケーブルテレビ「歴史街道～わたしたちのまちの歴史と文化」は、今後の歴史街道の重要な広報媒体として、関係者の理解・協力を得ながら、将来的には首都圏ほか関西圏外での放送も視野に入れ、番組の継続発展と、その特性を活かした更なる効果的な情報発信を図る。また、朝日放送「歴史街道～ロマンへの扉～」との連携についても継続的に実施する。

・活字媒体を通じた広報

活字媒体を通じた情報発信も重要なテーマの一つであり、中でも公認ガイドを最重要ツールと位置づけ、普及と活用訴求に努める。そのほか、既存媒体との連携強化に加え、新規媒体の開拓・活用についても積極的に行う。

・新聞社等の協力による事業

首都圏を中心に関西圏外の一般個人を対象とした広報・PR活動の重要な柱の一つとして、新聞社等の協力による講演会の充実を図るとともに、講演会を契機とした歴史街道関連の情報発信機会の獲得につなげてゆく。

2) 運輸・観光関係事業者との関係強化 (○)

フリーペーパー等の媒体での情報掲載、当協議会ツールの掲出・配布、展示機会の提供など、これまでの協力関係を継続し、連携を強化していく。

また、新規共同事業も視野に入れた検討も行いたい。特に「歴史街道」を切り口に歴史の舞台としての関西の魅力をPRしやすい首都圏においては、関東圏の事業者および首都圏で広報を行う関西圏の事業者に対し、「歴史街道」を活用していただける手法を提案していく。

3) IT広報の推進 (○)

ホームページ、携帯サイト、メールマガジンといった電子媒体は、現代における大変有効な情報発信手段であり、コンテンツの充実と機能向上を継続する。特にホームページについては、コンテンツもさることながら、利用者の利便性を重点的に改善する。

また、歴史街道倶楽部の会員サービス向上にも取り組んでいく。

一定の予算・マンパワーが確保できれば、優先度の高い取り組みの一つとして、ITを活用したモデルコース提案の充実に取り組むたい。

4) 情報発信サポート機能の充実 (○)

地域がメディアを通じて行う情報発信を、市町村情報交換会の開催などの形で充実したサポートを行うとともに、他団体主催の地域PRイベントなどにも積極的に協力する。

また、平城遷都1300年、伊勢神宮式年遷宮など大きな記念年の事業進展に向け、歴史街道として積極的に協力できる方策を検討する。

5) 「オール関西」の動きと連動する (○)

国の観光政策が「国内志向」へと転換しつつあり、「+1泊観光」「長期滞在型の観光」「特徴や交流人口を意識した地域価値の創造」といったことが、今後のわが国の大きなテーマになる。

各地域やKU（関西広域機構）ほかとの連携により、その有効な受け皿づくりをおこなう必要がある。

第六期においては、例えば以下のような共同事業を実現したい。

関西は北京やソウル、香港、台北などで何回となくセミナーやイベントを実施しているが、その一方で、同様の事業を東京や地方都市で実施しようという広域組織が

歴史街道推進協議会しかない、という現状を打開したい。例えばKUに関連する13地域（2府7県4政令市）から出資を募り、年間で（最大）13回の発信活動を実施することなどを検討するべきである。

また、上記にあわせて、ゾーン別の統一パンフレットなどを作成したり、首都圏など関西圏外における関西関係VIP名簿（出身者、企業関係者、赴任経験者、メディア関係者など）も再整備していく必要がある。

既存の広域事業の活用・充実として各団体の既存事業をうまく「関西全体として」継承・発展させることも考えていくべきである。そうすれば、全国的に広報を展開する事業が可能となる。

例えば、博物館の無料公開はすでにKUが実施中であるが、現在の問題点は「関西文化の日」を中心とした実施であるため、「同じ日に多数の施設を無料化されても回れない」ことにある。これを、1月＝奈良県下、2月＝福井県下・・・とし、13種類のポスターを制作することにより、該当月に各府県市を訪問する呼び水にしておくことなどが考えられる。

5. 歴史街道倶楽部事業

(1) 事業推進の方針

1994年に発足した当倶楽部は、2006年度より財務体質及び広報活動の強化のために重点事業に切り換え積極的に展開してきたが、第六期中には創設15周年を迎えることとなる。これを機に、記念イベント開催など更に活動を充実させていく。

(2) 具体的事業内容

①創設15周年記念イベント (○)

1994年に発足した当倶楽部は、第六期の初年度に当たる2009年に創設15周年を迎えるため、記念イベントを企画・実施し、活動を大いにアピールしたい。

②会員増強 (○)

会員増強についても他団体と連携を進めたり、当協議会の各種イベントを会員募集の場として有効活用するなど積極的に取り組んでいく。

③既存事業の展開 (○)

倶楽部の主要なメニューである「歴史のまちウォーク」、「歴史街道講演会」、会員誌「歴史の旅人」については、第五期と同様に積極的に取り組んでいく。

第六期計画 事業一覧

○：当期中に実施する事業 △：国・地域等から資金獲得出来た際実施する事業

	事業項目	事業レベル
メイン ルート 事業 計画	①歴史街道ムーブメントの始動	
	1) 歴史街道ツアーの拡大	○
	2) 寺社との連携	○
	3) 各施設等との連携	○
	②歴史街道の魅力付けに関する取り組み	
	1) 「日本風景街道」事業の推進	
	a. 「伊勢街道」	○
	b. 「まほろば」	○
	2) 町屋店舗のネットワーク化	○
	3) 「語り部」(ボランティアガイド)との連携	○
	③伊勢～飛鳥～奈良～京都～大阪～神戸における地域事業	
	1) 歴史街道推奨ルートの選定	○
	2) 各地域毎の取り組み	
a. 「伊勢～飛鳥」	○	
b. 「飛鳥～奈良～京都」	○	
c. 「京都～大阪」	○	
d. 「阪神間」	○	
ネット ワーク 事業 計画	①紀伊半島における事業	
	1) 地域整備事業	△
	2) 紀伊半島交流会議	○
	3) ツアー事業	○
	4) 案内所 道の駅のネットワーク形成	○
	5) 新しい魅力の打ち出し	△
	②古代史ネットワーク(堺～飛鳥、丹後・但馬)における事業	
	1) 世界遺産登録の推進(南大阪～飛鳥)	○
	2) 地域整備事業	△
	3) 連携会議と地域リーダー支援	○
	4) 世界遺産登録を踏まえた受け入れ体制の整備 (堺～飛鳥間)	○
	5) 広域マップの活用(丹後・但馬間)	○
	③戦国～江戸時代関連地域(福井・滋賀・兵庫ほか)における事業	
	1) 全体事業	△
	2) テーマ連携	△
3) やまぎわ歴史街道(福井)	○	
4) 日本風景街道「琵琶湖・中山道」の推進	○	
5) 姫路を中心とした周辺観光の推進	△	

	事業項目	事業レベル
広報事業計画	①「歴史街道」を具体化した情報発信	○
	②情報発信先に応じた広報の推進	
	1) 一般向け広報（スタンプラリーを含む）	○
	2) 会員・関係者向け広報	○
	3) 関西圏広報	○
	4) 首都圏広報	○
	5) その他の地域への広報	○
	6) 他団体との連携による海外への広報	○
	③外部媒体を通じた広報の推進	
	7) メディアとの関係強化	○
	8) 運輸・観光関係事業者との関係強化	○
9) IT広報の推進	○	
10) 情報発信サポート機能の充実	○	
11) 「オール関西」の動きと連動する	○	
歴史街道倶楽部事業	①創設 15 周年記念イベント	○
	②会員増強	○
	③既存事業の展開	
	1) 「歴史のまちウォーク」	○
2) 「歴史街道講演会」	○	
3) 会員誌「歴史の旅人」	○	

6. 収入確保のための課題

(1) 収入・収支の推移

	収入	支出	収支差額	繰越金
平成17年度	132,806	139,307	-6,501	4,594
平成18年度	129,050	106,528	20,533	25,157
平成19年度	109,962	98,222	11,740	36,889
平成20年度	105,572	98,534	7,038	43,927

収入内訳	会費	歴史街道 倶楽部	物産 倶楽部	物産 振興費	共同事業	広報協力金	受託事業
平成17年度	31,115	30,563	1,831	8,647	11,700	23,176	24,957
平成18年度	40,715	28,150	435	574	8,000	18,579	31,673
平成19年度	43,365	27,284	—	—	7,200	16,937	13,730
平成20年度	42,365	29,046	—	—	6,000	16,632	9,998

- ①平成17年度の財政悪化状況から脱し、20年度には適正規模の繰越金を何とか確保した。
- ②しかし事業資金の大黒柱であった「受託事業」や「市町村共同事業」の減少などにより収入・収支ともに漸減傾向が顕著になり、またそれに伴い、事業の縮小均衡を図らざるをえない状況になりつつある。
- ③収入確保の取組みは、運営基盤強化の最大の課題であるが、金融危機に端を発した世界同時不況が進行するなか、事業資金を大幅に拡大することは当面極めて困難であることが予想される

(2) 基盤づくりのための基本的な考え方

- ①協議会の強みが発揮・活用できる分野に、限られた事業資金を重点配分するための事業構造を検討する
- ②会費収入など現在の収入の維持拡大を図ると同時に、国プロジェクトや連携事業など企画提案型の事業を積極的に展開し新たな事業資金確保に努める。

③観光関連事業者など目的が共通となる団体への連携事業提案やパートナー化＝スポンサーの獲得などを検討する。

④「事業は人なり」の原点に立ち、一人ひとりが能力開発に努め、協議会運営の高効率化を進める

主要項目	具体的取組み
1. 法人会員の維持・拡大 ◆既存会員へのサービス向上 (228 団体の維持 H20. 7) ◆未加入自治体の加入促進 ◆未加入企業の加入促進 (関西&首都圏)	<ul style="list-style-type: none"> ・勉強会を充実し「役立つ情報の提供と交流の場」を提供 ・担当を決め、細やかな情報提供を実施（パートナーシップづくり） ・地域担当を決め協議会活動の報告や課題のヒアリングを実施 ・講演会など共催事業を通して「歴史街道」をPRし認知度を向上 ・関経連など財界のバックアップを獲得
2. 国プロジェクトへの参画	<ul style="list-style-type: none"> ・自治体等とワーキングを実施し一体で事業提案と予算獲得を推進 ・事業提案コンペに積極的に参画し地域との連携を強化 ・六期計画に沿った要望活動を実施
3. 個人会員の維持・拡大	<ul style="list-style-type: none"> ・新規会員獲得のためキャンペーン等を通じたPRを実施
4. 企画提案型の事業創造	<ul style="list-style-type: none"> ・外部団体を含めた「ワーキング」を実施し事業検討を進める